

## 東海地方における近代地域医療の形成

—小寺家文書をてがかりに—

黒野 伸子<sup>1)</sup>, 大友 達也<sup>2)</sup><sup>1)</sup>宮崎学園短期大学, <sup>2)</sup>就実短期大学

## I. はじめに

小寺家文書は、岐阜県大垣市の旧家小寺家に伝来する約9000点の古文書群である。その中に「衛生医療」に分類される資料が約100点ある。明治期から大正期にかけての処方箋、薬価及手術料明細書、製薬会社からの私的な書簡、受診券など、受療行動を示す貴重な資料であることがわかった。特に「薬価及手術料明細書（以下明細書と記す）」は、診療内容、購入物、診療報酬、金銭授受の詳細が記され、単なる領収証とも異なる特異な書類であった。わが国では、医療保険による医療費支払い制度が整備されており、診療明細書（レセプト）を発行するが、明細書は、その萌芽と思える様式を持っていた。当時の地域医療規模や患者側の経済的、物的負担、受療行動も読み取れる。病状に言及した書状や家族で書き継いだ日誌も残されていた。

本研究は、小寺家文書を中心として、筆者らが確認した資料群を参照しながら、東海地方における近代地域医療形成の様子を明らかにすることを主な目的としている。なお、本研究は、近代地域医療の形成過程を検証し、東海地方に伝わる医療資料統合のための基礎研究として位置づけるものである。

## II. 研究方法

近代地域医療形成の様子を明らかにするためのアプローチは「医療提供者からの視点」「患者および家族の視点」の両視点から行う。本研究では、「医療提供者」を「医家」、「患者および家族」を「患家」と表記する。使用する主な資料は、医家の視点では、『信玄病院資料』『明治の医塾生 馬淵良三日記』、患家の視点では、『小寺家文書』とした。なお、岐阜の地域医療発展には江馬家を考慮に入れる必要があるが、本稿では新たに見つかった資料を中心として考察し、大垣蘭方医とのつながりは今後の研究に譲りたい。

## III. 研究結果と考察

## 1. 医家の視点から考察した近代地域医療の形成と西洋医学の普及

筆者らが参照した医療に関する資料から、東海地方で活躍した医家の概要、医療施設開設の様子をまとめた。その結果、当該地方では、明治40年代以降に西洋医学の継承がほぼ完了したことが推測される。

## 2. 患家の視点から考察した近代地域医療の形成

本研究では、特に患者家族の支援行動に注目し、西洋医学受容に患家がどのように関わっていたかを考察した。小寺家日誌には、地域の開業医を支援した記載もみられ、当主が地域医療発展に寄与し、西洋医学受容の教導者として活躍したことがわかる。明細書発行状況からは、病院会計が現金授受を基本とし、およそ1ヶ月ごとに定期的な支払いが行われていたことが読み取れた。わが国では、何世紀にもわたり盆と年末にしか支払いをしない「盆暮れ勘定」が行われていたが、病院経営の健全化や医療技術向上のための資金確保の面からすれば、このような動きはまさに近代地域医療発展への嚆矢といえるのではないか。

## IV. おわりに

本稿では、現在確認できる医療関連資料を参照しながら、「医家」「患家」の両視点から近代地域医療形成の様子を考察した。その結果、近代地域医療の形成には以下の3点の特徴があることが示唆された。

- 1) 西洋医学の受容は明治40年代にほぼ完了し、現代地域医療の基礎ができた。
- 2) 明治期に病診連携、紹介（診療情報提供）が行われており、地域医療ネットワークが形成されていた。
- 3) 地域住民は教導者のもと、西洋医学の重要性を理解しつつあった。

しかしながら、取り上げたのは数例の資料であること、読み込みが十分ではなかったことから、推測に留まっている部分も多く、東海地方全体の様子を考察するには至らなかった。今後は、東海地方に分散する資料を整理統合し、東海地方の地域医療形成の過程を解明していきたい。